

## 配置薬に使用される生薬の特徴⑧

村上 守一

### トウキ(当帰)

*Angelica acutiloba* Kitagawa (セリ科 *Umbelliferae*)

『神農本草経』(漢代)の中品に収載され、漢方の要薬として重要な生薬です。昔中国に婦人病を患った妻がいました。子どもできなかったことから、夫が家を出てしまい困っていました。妻がこの薬を飲むと、病は癒え、夫に「当に(まさに)家に帰るべし」と言ったことからこの名がついたといわれています。このことの実実は定かではありませんが、『本草綱目』(明代)に「古人が妻を娶るは胤を嗣ぐためとした。当帰は血を調え、婦人の要薬である。そこに夫を思う意味があるところから当帰の名があるのだ」と記しています。これらのことはトウキの薬効を良く表していると思われる。

現在の局方では原植物をトウキ(大深当帰) *A. acutiloba* とホッカイトウキ(北海当帰) *A. acutiloba* var. *sugiyamae* の2植物に規定しています。大深当帰はミヤマトウキ *A. acutiloba* var. *iwatensis* を17世紀頃に京都の山城や奈良の大和地方で栽培化し、改良されていったものと伝えられています。現在は京都での栽培はなく、岩手、茨城、群馬、愛媛、高知、宮崎、富山などで栽培されています。一方、北海当帰は大深当帰が明治の末期に北海道に移入され、北海道の風土に合った種を選抜したという説と、同属のエゾノヨロイグサ *A. sachaliensis* との交配種から選抜されたという説がありますが定かではありません。現在北海道で栽培されている品種はほとんどこの種に固定されています。

他に薬用として用いられたトウキの種類は、中国の四川、甘粛、雲南省で産するカラトウキ(唐当帰) *A. sinensis* があります。また、野生種のミヤマトウキやツクバトウキ *A. acutiloba* f. *tsukubana* を用いることもあります。

### 植物の特徴

トウキはセリ科、シシウド属 (*Angelica*) の多年草ですが、生育状態が良いと2~3年で抽苔(花の茎をあげること)し、結実して一生を終わる植物です。大深当帰 根出葉の葉柄は赤紫色を呈し、2~3回3出羽状複葉、小葉は深裂し、濃緑色で艶があります。花茎を夏に上げ、複散形花序を頂生し、多数の白色小花を開きます。

北海当帰 大深当帰より全てに大型で、葉柄は緑色。



オオカブトウキ



ミヤマトウキ



ホッカイトウキ

## 生 薬

播種後 2 年目の初冬に堀上げ、寒風でハサ掛け乾燥後水洗し、70℃のお湯に 10 分程浸し、湯揉み洗いをした後、棚乾燥をします。甘く、香りがよく、しなやかなものが良品。



当帰

## 成 分

精油：ブチリデンフタライド、ブチルフタリド、リグスチリド等。その他多糖類等。

## 薬効と使用法

体を温める作用があり、補血、強壯、鎮静、鎮痛薬として貧血症、腹痛、生理不順、生理痛や婦人の更年期障害に当帰芍薬散、四物湯、乙字湯、紫雲膏、十全大補湯、防風通聖散等の漢方処方に配合される他、実母散に配合されています。